

國學院大學學術情報リポジトリ

神社本殿の建築的特質：
公開学術講演会(平成20年10月18日)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤澤, 彰 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001688

公開学術講演会（平成20年10月18日）

神社本殿の建築的特質

藤 澤 彰

ただいま大変丁寧で過分なご紹介をいただきまして、恐縮です、藤澤と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

私は、建築学を勉強しているんですけども、主に神社やお寺という文化財を長年研究しております。それで、今回、國學院大學伝統文化リサーチセンター資料館に展示されている内宮の模型などもつくりましていろいろ勉強させていただきました。また、西暦2000年、ちょうど出雲大社から巨大な柱が出てまいりました。その発掘などにも参加させていただきました、いろいろ勉強させていただきました。その辺のことの一端をご紹介できたらと思っています。

日本には、「神社本殿」と言われましていろいろな形のタイプの建築があるんですね。建築のほうではいろいろ分類していくのですが、普通、屋根の形などで建物をよく分類していきます。

もうご承知かと思いますが、神社建築というのは一番単純な屋根の形、「切妻造」と呼んでいますけれども、ちょうど本を開いて、単純な三角形ができますが、これを「切妻造」と呼んでいます。そのときに、屋根の長手のほうを正面にして、正面から見ると長方形の屋根面が見える向きに配置するのか、90度回転して正面から見ると三角形の屋根が見える向きに配置するのかと、2通りございますね。屋根の長手のほうが見える、こういうのを「平入」と称しております、プリント（末尾参照。以下同）の最初に「平入系」と書いてあります。その「平入系」というのは、建物の正面、平のほ

うから出入りするというような意味でございます。

次に「妻入系」と書いてありますが、これは逆に90度回転して三角のほうを正面に向ける、こういう屋根を「妻入」と称しております。そこから出入りするのを「妻入系」と呼んでいるわけですね。

神社建築も、その2つの形で分類しております。一番有名な伊勢の神明造という形でこれは、内宮のほうでございますね【図1】。内宮と外宮がありまして、ほとんど同じ形です。この屋根のてっぺんに飾ってある太い丸い材、これを「鯉木」と称しますが、もともとは棟を押さえる機能的なものだったようなんですが、装飾に化しているかと思います。これが内宮のほうは10本ございます。外宮のほうは9本というような違いがあることが知られております。

もう一つの違い、一番見分けやすい違いは、屋根の上にのびているX字状の材ですね。これを「千木」と称しておりますが、この千木の先端の切り方が、内宮と外宮では違ってございまして、内宮の場合は水平に切っております。「内削」と称しております。外宮の場合は、ここを垂直に切っているんですね。そういうような違いがあるんですが、ほとんど同じ形で内宮、外宮の御本殿が、正殿といってい

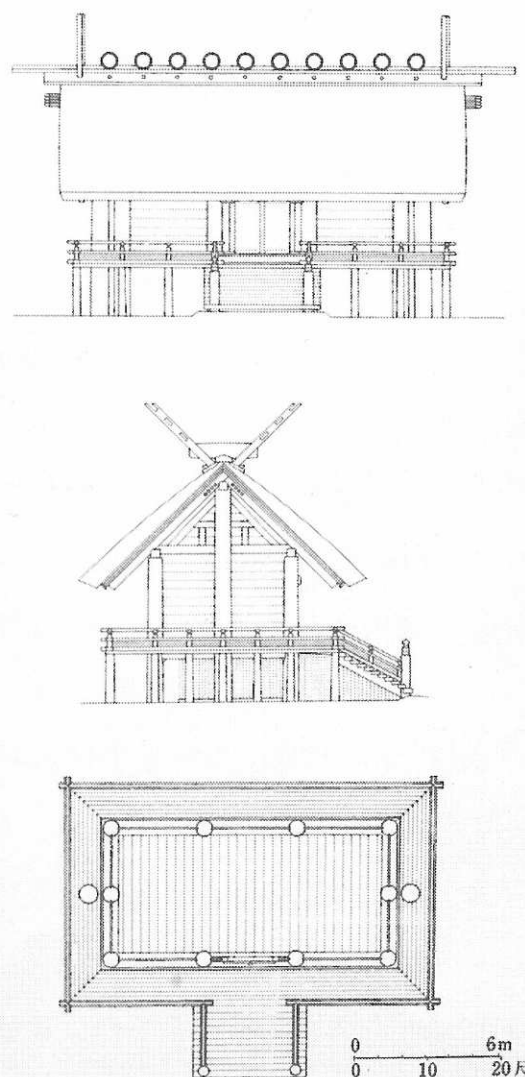


図1 伊勢神宮内宮正殿 正面図 側面図 平面図
『日本建築史図集』（日本建築学会編）

ますけれども、建っております。

平面図でございます（【図1】下）。大変直線的なデザインで、屋根は萱葺きという、カヤを厚く束ねてふいたもので、大変素朴なシンプルなデザインです。洗練されているんですけれども、シンプルであると。

もう少し詳しい特色を指摘いたしますと、この側面図（【図1】中）、側面の写真、ここに真ん中に立っている柱がございますね。これは地上から棟木という部材まで一直線に伸びている部材でございますして、「棟持柱」と称しております。まさにこの屋根の棟木を持ち支えているというような意味で「棟持柱」と称しております。これは、日本建築は、普通、桁の位置で一度柱を切って、その上にまた何か束を立てるとというのが基本的なやり方でして、この棟まで届く柱はあまりないんですね。全く皆無ということはございませんが、普通はやりません。伊勢の場合は、こういう棟持柱を使っている。

ちょっと元に戻しますけれども、今言った柱がこれで、平面図で見ますと、ちょうど縁側のところに張り出して出ているわけです。ここに隣に壁の柱がありますけれども、それとは別に、縁のところに出ている。これも伊勢の特色です。

もう一つは、ここには全然出てこないんですけれども、真ん中床下に「心御柱」と言われる独立柱が立っているわけです。

これが側面図（【図1】中）ですね。右のほうが正面に当たります。先ほど言った千木の水平のカット（切り口）は、これのことです。内削という、内宮のやり方です。

これがわかりにくいのですが、破風という材がございまして、何か、くしが刺してありますね。これは破風をとめる部材で、「鞭掛」と称しております。こういったものも神明造の特色的な細部です。

床下を見ますと、地面に直接穴を掘って柱を立てる「掘立柱」というやり方です。古くはほかの神社でもこういったもの、掘立柱だったのですが、今は掘立柱で本殿を建てる所は大変少なくなっておりますね。伊勢の場合

は古い伝統を維持している。2本柱が並んでいます。外側が縁側、御正殿にあります縁側になります。縁側のところに立っている、先ほどの棟持柱ですね。その隣が壁つきの柱でございます。こうペアで立つということになります。

後でも問題になりますが、柱の立て方というのが神社建築の場合、かなり重要な要素でございます、建築の場合、柱を立てるという方法として3つございます。

今ここに見えているのが「掘立柱」という、地面に穴をあけて柱を立てる。電信柱みたいなものなんですけれども、そういうやり方。

それと、大きな礎石、石を据えまして、その上に柱を立てるという「礎石立」というやり方がございます。これは、寺院建築ですね。古代におきましては、ほとんど寺院建築に見られる手法です。寺院建築から始まったと考えていいかと思います。

もう一つのやり方が「土台立」と称しまして、これは、今は土台というのはごく普通に家を建てる時、木造ですと土台がございすね。木の角材を据えて、その上に柱を立てていくというやり方で、現在ではポピュラーなんです、実は古代、そうですね、中世ぐらいまでは大変少ないやり方でございます。土台立は少ない。唯一、土台立を古くから使っているのが知られているのは、後で出てきます流造と春日造だけなんです。江戸時代ぐらいになりますと、逆に土台立の民家なんていうのが増えてきて、現在、我々が知っているようにポピュラーになるんですが、古い時代は土台立というのがないんですね。これが不思議といえば不思議な柱の立て方です。

伊勢の場合は、こういった掘立柱になっております。

正面の高欄、階段の上り口のところには擬宝珠という部材があります。

この高欄に手すりがございますが、ここに「宝珠」と呼んでいる座玉、色のついた座玉を飾るんですね。この宝珠あるいは擬宝珠などは、実は仏教建築の影響だと考えられております。伊勢神明造というのは、仏教建築の要素

を排除していると言われますけれども、よくよく見ていくと、やはり仏教の影響が見られるようです。

この宝珠、黒と、実は青というのものもあるんですが、ものすごく色が近くて、青が、ものすごい濃いブルーなんですね。

また、赤に白、あと黄色ですかね。「五色の座玉」と称している飾りでございます。

高欄の隅ですね。ここにもやはり座玉、宝珠が飾ってあります。

この辺の飾り金物という金具も、大変丁寧な文様を打ち出しています。伝統文化リサーチセンター資料館の模型でも、なるべくこういった模様まで再現しております。なかなか細かい仕事ができていると思います。

それで、もう一つこれも有名な話なんですが、伊勢神宮は式年造替という、定期的に建物を全部建て直す、ほかの調度品も全部つくり直すという方式をとっております。ほかにもいくつかの神社でそういったことをやっていたことが知られていますが、やはり経済的なこと、信仰上のことで、現代につながっているものはないようですが、伊勢の場合は、中世にちょっと中断しますが、現代まで式年造替、式年遷宮という制度が維持されております。そのときに、もう大変すぐれたシステムを確立していると思うんですが、形態、形、古いスタイルというものを、正確に再現していくという努力が払われておりまして、建築的には大変なことだと思いますが、千何百年来の形がほぼ踏襲されているんですね。そのシステムがこの配置図にあると思います【図2】。

今、左のほうにいろいろ建物の名前などが書いてありますが、中央にあるのが正殿で、後ろのほうに東西の宝殿などがあります。左の敷地に建物が建っている状況を示しているのですが、そのすぐ隣に、全く同じ規模・形式の敷地を用意しているんですね。それで、20年たつと——随分前から準備されるのですが、20年を迎えるに当たって、この図でいきますと右側の敷地に新たな建物を建てる。左をコピーするわけですね。左の建物、既存の建物をお

手本として建てる。そうしておいて遷宮を行って御神体を移す。新たな建物に移す。それで古い建物を撤去して、こちらのほうを今度は更地にして、次の20年のために空き地で待っているというような感じです。ただ、この真ん中には心御柱という、先ほど床下に立っているという柱が残されて、「覆屋」という小屋をかけて、20年、ぼつんとあると、そういう制度です。

ですから、遷宮の直前または直後には、このように2セット、2組の建物が並ぶ時期があるんですね。

これは通常で、写真の上のほうに建物が建っております。これが正殿で、これが東西宝殿。右側が正面になっております。下の敷地の真ん中にぼつんと小さな建物が建っている。これが心御柱の覆屋であって、この中に見えませんが心御柱がぼつんと立っているという状況です。これを「古殿地」と称します。

遷宮を迎えるに当たって、新たに建物をつくっている。その建物ができた状態で、こういう状況が20年の後に何年か出現するわけですね。2組の建物群がある。こうしておいて、こちらの正殿から新しい正殿に御神体を移して、

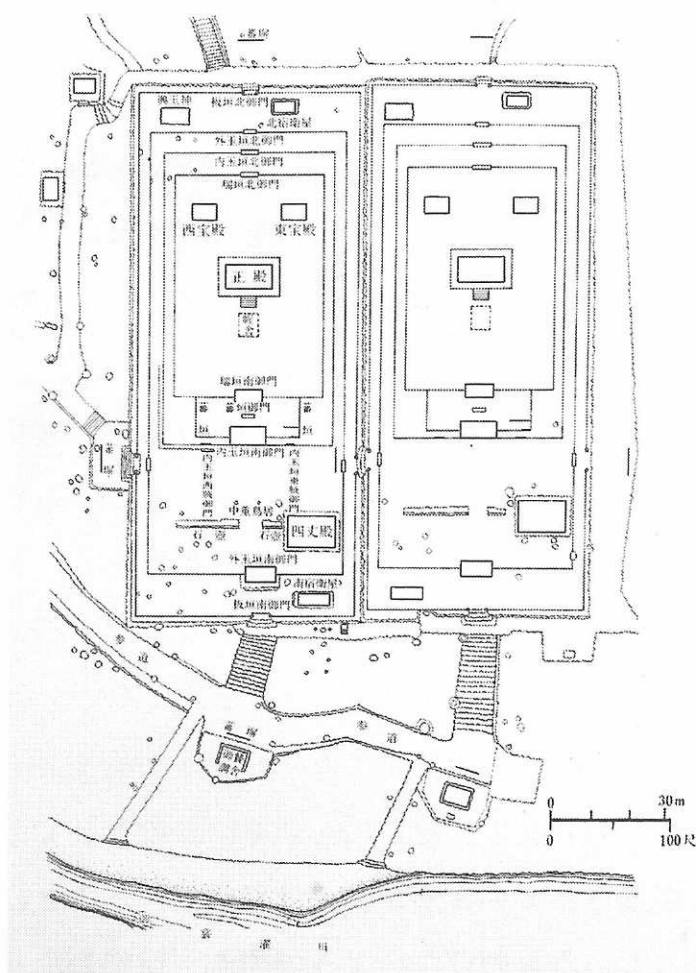


図2 伊勢神宮内宮配置図
『日本建築史図集』（日本建築学会編）

古いほうを撤去する。こちらには、先ほどの小さな小屋がまた建てられまして、中に心御柱が立っている、そういうシステムでございます。

この式年遷宮のシステムは日本独特の考え方だと思うんですが、洋の東西を問わず、建築に永続性とか永遠性、ある建築が永遠に続いてほしいと願うというようなことが人間にはある。そういったことを実現させるために、例えばわかりやすい事例で言いますとエジプトのピラミッド、これもある意味では、あのピラミッドが永遠に続いてほしいと願った結果だと思うんですが、そういうときに、石で物理的に永遠に続くようにと願う、そういう考え方で物をつくることがあるわけですね。

ところが、日本の場合は、そういう永遠に続く石で建物をつくらないこともないのですが、なかなかつくりにくい。木という材料でつくることが多いのですが、それが物理的に永遠に続くとはだれも思わない。そういうときに、建物が永遠に続いてほしい、永続性を保ってほしいというときに、定期的に物をつくりかえ、しかも、同じようにつくる。つくる過程を神事として同じことを繰り返すということをするわけです。それによって、物としては永遠に続いているわけではないんですが、その建築のコンセプト、建築に対する思い、この思いみたいなものは永遠に続いていくという、そういう考え方がよく出ている制度だと思います。

今モニターに出ているのは、実は神明造の中で、伊勢の場合は20年に一度建て直すわけですから、みんな新しいわけですね。ですから、古いものはない。日本で一番古い神明造と言われています、長野県の大町というところにあります仁科神明宮という建物です【図3】。これは江戸時代の前期、ちょっと年代がはっきりしませんが建てられたもので、最古、物として一番古い神明造です。伊勢のものに比べると、多少簡易化されていまして、屋根なども実は桧皮葺という、ヒノキの樹皮をはいで、それをふいたものですね。規模も少し小さくなっております。

神明造というのは、原則として伊勢神宮に関係するところにしか許されな

かったようで、この長野県大町の仁科というところは、「仁科御厨」と呼ばれる伊勢の所領があったところなんですね。そこに建てられたのがこの仁科神明宮でございます。国宝に指定されていますね。今、伊勢に行きましても、千木の先くらいしか見えないんですけれ



図3 仁科神明宮本殿（長野県大町市）

ども、ここに行きますと、こういった写真も簡単に撮れるぐらいの間近に見られますので、ぜひ見ていただきたいと思います。大町という、あの黒四ダムの長野県側からの登り口の町でございます。

屋根には、鯉木と千木がかかっています。

これは【図4】、2、3年前に出雲大社の境内のすぐ隣に島根県立古代出雲歴史博物館ができました。そこにある模型ですね。神明造。これは、たしか50分の1で外宮をつくっていると思います。外宮は先ほどちょっと言いましたが、鯉木が9本で、ここの千木、ちょっと見にくいのですが、垂直に縦に切れております。これは外宮の模型です。

これは実は、今、伝統文化リサーチセンター資料館に展示されています内宮の20分の1の模型の、製作工場で最終的な検討を行っているときの写真でございます【図5、6】。カヤぶきもかなりリアルに表現できているかと思えます。伊勢に行きましても、こういったディテールなど、なかなか細かく見ることは不可能ですので、

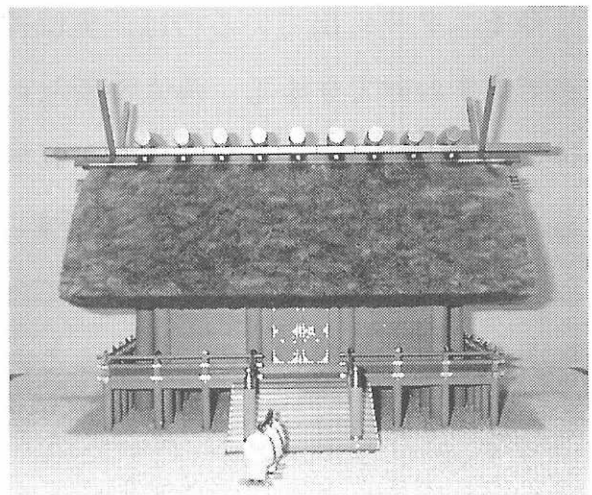


図4 伊勢神宮外宮正殿1/50
(島根県立古代出雲歴史博物館所蔵)

模型でというようなことになるかと思います。

千木というのは、実は破風板という部材がありますが、この材を破風という、屋根をつくる部材なのですが、古式の千木は屋根を貫いて破風がのびてできています。

この破風という材が伸びて伸びて屋根を貫いて出ている。こういうのがもともとの古い形の千木でございます。これが新しくなってくると、分離しまして屋根に乗っかるような——後でまた出てきます春日大社などもそうなんですが——置き千木というやり方になります。屋根の上にバツテンで置いているだけというようなものですね。伊勢の場合は古い形の千木になっております。

正面のディテールで、「五色の座玉」が飾られている。

扉口の飾り金物なども、かなり正確に再現しております。ちょっと見にくいかもしれませんが、こういう扉口の飾り金物にも表面に彫刻が施されているのですが、これもできる限り再現しております。

高欄、階周りのディテールでございます【図6】。

床下は、やはり見えないうようになっておりまして、模型では作りませんでしたけれども、実際はこの中、この奥に心御柱が立っているということです。

次に、流造という形をご紹介



図5 伊勢神宮内宮正殿1/20
(國學院大學所蔵)



図6 伊勢神宮内宮正殿 詳細1/20
(國學院大學所蔵)

します。

これも【図7】古代出雲歴史博物館にある模型なのですが、「流造」という名称は、この屋根の形にあります。正面に前のほうに屋根の流れが伸びている。こういうところから「流造」という名称が来ているかと思います。流造というのは、京都の上賀茂神社、下賀茂神社で代表されるつくりです



図7 上賀茂神社本殿1/50
(島根県立古代出雲歴史博物館所蔵)

が、模型は上賀茂神社をモデルにしていると思います。ほとんど形は同じなのですが、多少細部で上賀茂と下賀茂は異なるやり方になっています。

側面図ですね（【図8】左）。この図を見ていただきますと、屋根が前方に流れているのがよくわかるかと思います。この部分、前に流れている部分、これを「庇」と称します。本体部分、これを建築のほうでは「モヤ」と称しております。モヤという漢字は、「母屋」とか、「主屋」とか、いろいろな字を当ててののですが、本体部分というような意味だと思います。柱間2間分が母屋で、その右が庇ということです。

それともう一つ指摘しておきたいのは、柱の立っている基礎となっている部材で、これを土台です。古代の建築、この建物自体は古代ではないんですけども、古い建物で土台がわかるのは、この賀茂と春日大社ぐらいしかないんですね。神社建築の本殿に特色的に使われている部材でございますね。土台は材を井げたに組んで、漢字の井の字のように組んで、その上にすべての柱が立っております。

これは正面図（【図8】右）です。正面から見る土台というのは、この部材ですね。

下賀茂神社は2棟、同じ形の建物が、ちょっと右のほうに屋根が見えます

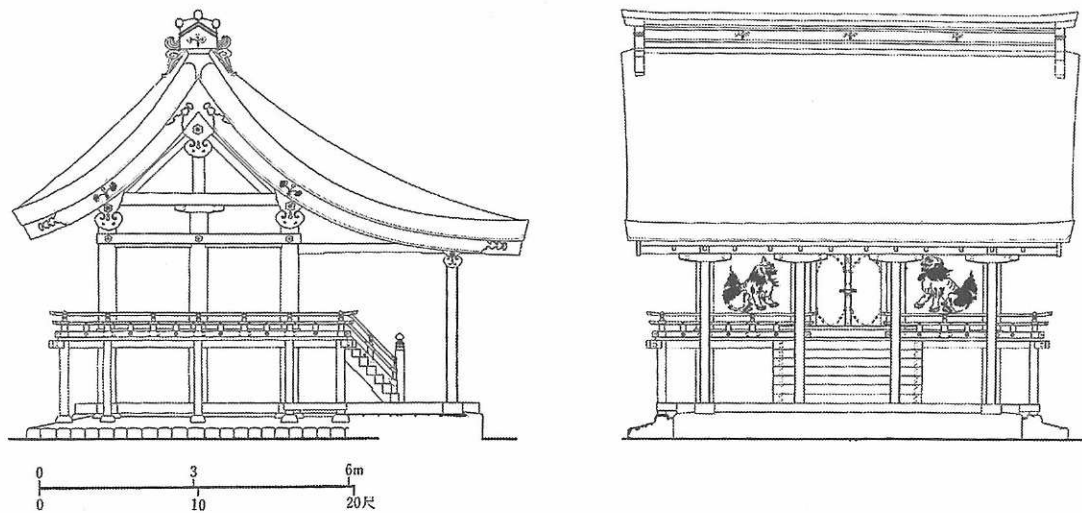


図8 上賀茂神社本殿 側面図 正面図 『日本建築史図集』(日本建築学会編)

が建っていますが、これが両方とも「御本殿」と称しております。東本殿、西本殿ですね。上賀茂はちょっと違うんですが、上賀茂は後ほどお話ししたいと思いますが、下賀茂の場合は、東西2殿が両方とも御本殿でございます。

上賀茂神社と下賀茂神社の違いは、ぱっと見たところはなかなかわかりにくいのですが、狛犬がございますね。ここは、彫刻の狛犬も飾ってあるのですが、上賀茂神社の場合は、この板壁に狛犬の絵が描かれております。狛犬の絵がここに描かれているのが上賀茂神社ですね(【図8】右)。

それと、高欄と階段、木階ですね、これに朱が塗ってあるのが下賀茂神社です。上賀茂は、これが白木になっております。見分けやすいのはその辺のポイントかと思えます。

【図9】が、今、上賀茂神社の御本殿周りです。2つ長方形の建物が同じ形のものがかいてありまして、右のほう为本殿、左のほうが権殿というふうになっております。

この権殿というのは、基本的には仮殿というような意味で、何か本殿に支障があったときとか遷宮のときにかわりになる控えの建物でございます。それを「権殿」と称しております。その辺が下賀茂神社と違うシステムなんです。

それともう一つ、軒周りのつくり方。社殿の軒周りには木口が見えていますが、こういう材を「垂木」というふうに建築のほうでは呼んでおります。屋根の面をつくる細長い角材ですね。それをずっと規則正しく並べていくのですが、流造の前に伸びている庇の部分の垂木はまばら。母屋のほうは密度が高い。

これを見ることによって、この庇というのが後から付加された、つけ加えられたのではないかというような考えもできるわけです。言えることは、この母屋部分と庇部分はつくり方が違うということなんですね。こういった特色もあります。下賀茂神社も、全くこの辺は同じようになっています。

基本的に流造は母屋という部分があって、その前方に庇という部分が付加された形と解釈できるわけですね。母屋があって、その前方に、空間を拡大するためですかね、こういう庇を加えたというふうに理解できるかと思います。

続きまして、【図10】この建物は平入系で仏堂みたいに見えるんですが、これは実は滋賀県の坂本にございます日吉大社の西本宮です。比叡山のふもと、坂本にある古い神社でございますが、正面から見ると、これはもう仏堂、仏教建築かと思うようなスタイルなんですが、これがちょっと変わった平面構成を持っております。

背面が、すばっと切り落としたような屋根の面が出ているわけです。

この建物の平面がどうなっているかという、これが平面図（【図10】下）です。

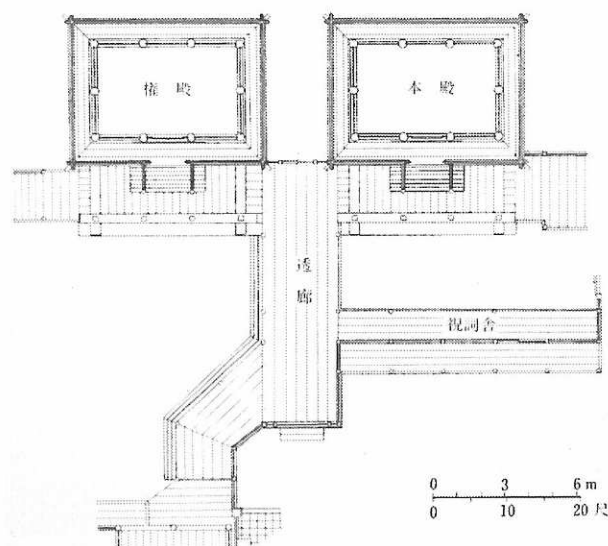


図9 上賀茂神社 本殿・権殿・祝詞舎・透廊 平面図 『日本建築史図集』（日本建築学会編）

これが側立面図です（【図10】上）。左が正面、右が背面。背面は切り落としたような感じになっております。

平面的に見るとどうなるかというと、実はこれが中央にある部分が母屋です。で、この日吉大社の場合は、母屋の三面、左右と正面に庇を張り出している。これが庇という部分で、三面に庇を張り出して空間を拡大している。どういうわけか背面は庇を設けなかったんですね。ですから、背面の屋根の形がこうすばっと切れている、そういう形になっているというものです。空間を拡大していくシステムの1つのあらわれですね。

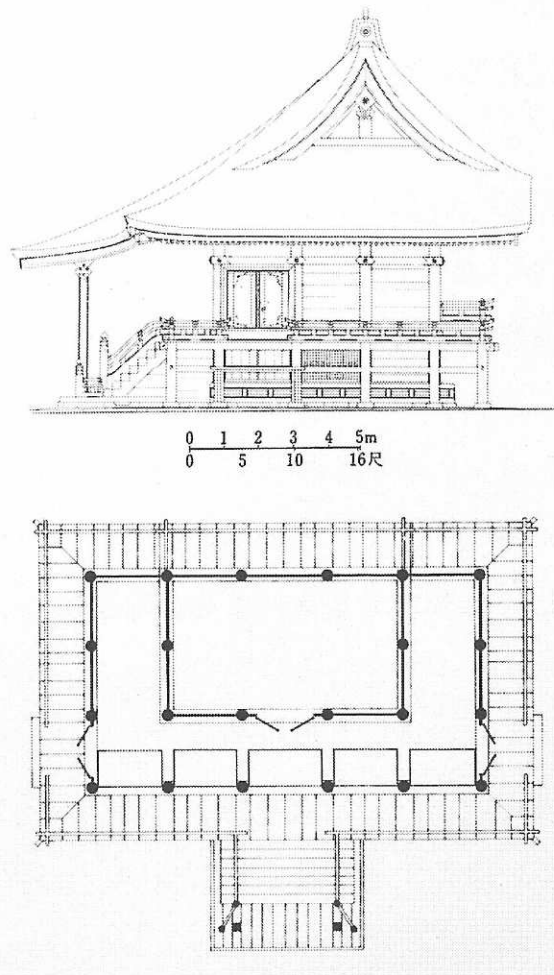


図10 日吉大社西本宮本殿 側面図 平面図
『日本建築史図集』（日本建築学会編）

これが大体、有名なところの平入系の御本殿かと思います。まだ幾つかほかにもあるんですけども、代表的なもの、あとは八幡造というのは、今日は紹介していないんですけども、そういったものもありますが、神明造、流造、で、この日吉造というのは大変少ない事例ですね。プリントにも書いておきましたが、流造というのが、実は神社で一番多い形式で、正確に数を数えた人はいないのですけども、日本の神社の6割から7割が流造だと言われています。そのくらい数が多いかと思います。

次に妻入系のものになりますと、有名な島根県の出雲大社でございます。これは大変大きな建物ということが特色で、現在の建物でこの千木のとっぺ

んまで高さが8丈あるということです。1丈が3メートルでございますので、ここまでが24メートル。今、マンションなどですと、大体1階の高さが4メートルぐらいで済むのですが、そうしますと6階分ですね。マンションの6階ぐらいの高さがございます。現在建っているものは、江戸時代の延享元年(1744)という江戸時代中期に再建されたものです。

大社造につきましては、平面図、断面図、そしてまた模型の写真なども出しておきました【図11、12】。

先ほどの伊勢の神明造の千木とは違いまして、大社造は置き千木です。屋根の棟の上に、もうぼんとクロスする部材を置いているだけの全くの飾りですね。こういう破風板から伸びている千木ではなくて、もう屋根の上に乗っける置き千木という装飾になっています。

古くはこういう屋根のラインも直線だったことがわかっておりますが、現在のものは、この前の寛文、あるいはその前の慶長という時代に建てかえられているのですが、そのぐらいからこういう曲率を持った屋根になっているかと思えます。

正面。平面図（【図11】下）を見ていただければわかるかと思いますが、

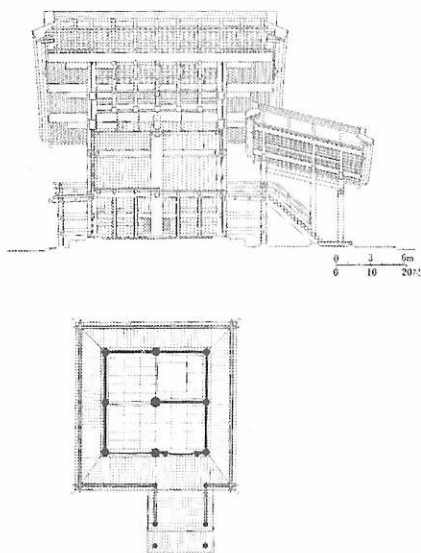


図11 出雲大社本殿 断面図 平面図
『日本建築史図集』（日本建築学会編）

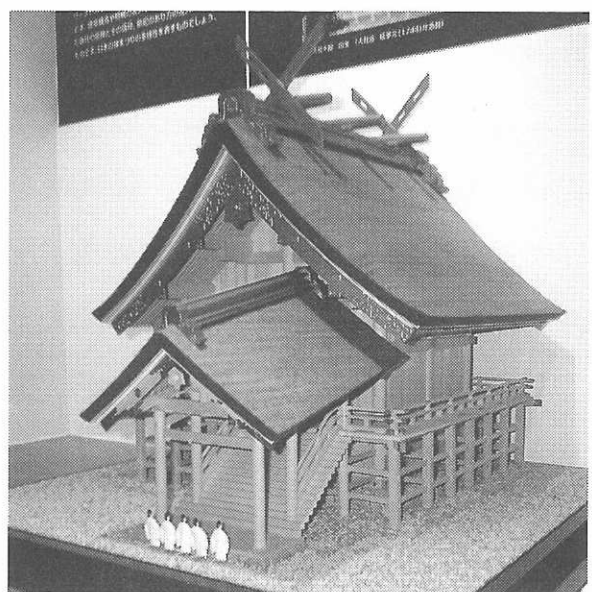


図12 出雲大社本殿1/50
(島根県立古代出雲歴史博物館所蔵)

上り口、階段、階が片方に寄っているんですね。正面間口が、柱間2間でございますから、どちらかを入り口にしなければいけないということで、片寄って間口を設けているのかと思います。

9本柱。大体正方形です。特に真ん中の柱が太い柱で、妻のこの正面のこの柱が少し太い。実は、これもやはり棟持柱となっています。この柱とこの柱が、棟まで伸びている棟持柱となっています。この柱がずっとここでも切れることなくここまで伸びているんですね。

ところが、これは同じ棟持柱でも、伊勢とは違いまして、縁の中にこの壁の柱とは別にもう1本立っているのが伊勢でございますが、大社の場合は、壁についている柱が棟持柱になっている。

実は、図ではわかりにくいのですが、壁の真よりもこの棟持柱がわずかですが外側に立っています。後で出てきます神魂神社の御本殿は大社造で、大変古い建物なんですけど、この柱がかなり外に出ています。また後で紹介します。

それと、9本の柱が立ってこういう田の字型の平面をつくって、ちょっと変わっているんですよ。こういうふうな空間構成、かぎ型の空間構成になっていて、これを「御内殿」と称しているのですが、この御内殿は、この図でいきますと左側を正面にしております。神様がいらっしゃる御内殿は、左側が正面です。ですから、御本殿の正面から参拝しますと、神様の側面を横からお参りすることになってしまいますね。ちょっと不思議な平面です。

棟持柱というのは、屋根を支える柱です。ちょっと図面が見にくい。この棟持柱は、実は棟まで伸びています。

真ん中の柱、ちょっと太い柱、これは、現在は出雲大社のほうでも「心御柱」という言葉を使っていますが、大社の資料に「心御柱」が出てくるのはごく最近のことで、実は古い言葉としては「岩根御柱」と呼んでおります。伝承によりますと、地下の世界と天上の世界を結びつけるような神聖な柱であるというような説明もあるようです。

ところが、建築的には、これが天井をちょっと越えるだけで棟木まで伸びていないんですね。建築のほうで言うと、構造的には実はこれがなくても、この建物は建つというようなことも言われています。構造的には必ずしも必要ではない柱。ですから、逆に言えば、神聖な祭儀上の柱と言えるかと思います。

今、出雲大社は、屋根ふきかえということで修理に入りまして、御遷宮が行われております。本殿の中をのぞくようなこともできるようになっているんですが、そのときにいただいた、これはパンフレットですかね、パンフレットにあった資料を持ってきたのですが【図13】、これが実はどう見るかという、ここが心御柱。真ん中の柱ですね。私は「岩根御柱」と言いましたがけれども、心御柱。で、上が北ですね。下が南、東、西ということで。これは天井の図です。天井の図で八雲という、天井にこういう雲がかかっているんですね。八雲というんですけれども、7つで何だという話もございます。数えると7つしかないんですね。それと、現在、御本殿に描かれているのと、ちょっと形が違うようですね。あまり厳密には見ていないんですけれども、多少違う形でかかれています。

ここにちょっと出ていますが、寛文の年号がありまして、実は出雲大社では、今建っている延享の建物の前には寛文という江戸時代

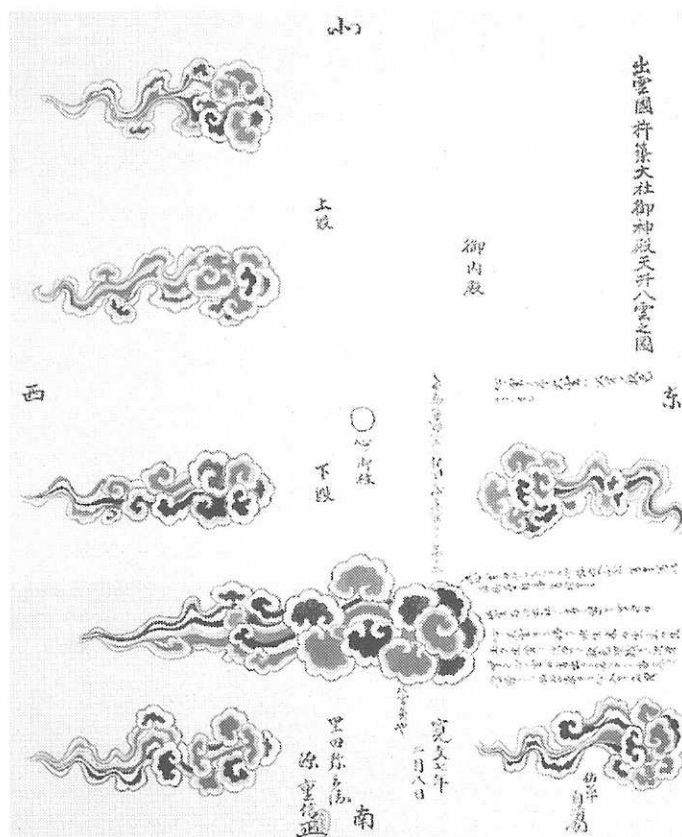


図13 出雲国杵築大社御神殿天井八雲之図
(寛文7年 出雲大社所蔵 大社パンフレットより)

の初めぐらいに造替が行われています。そのときの資料の中の1つですね。ほかにも寛文の資料はものすごくいっぱい図面が残っておりまして、それで寛文の復元模型などもつくったことがあるんですが、寛文の状況はよくわかる。延享の現在建っているものもよくわかる。それ以前はあまりわからない状況です。

これは古代出雲歴史博物館にある大社の模型ですね【図12】。神官の方が並んでいますが、現状の模型です。ここのてっぺんまでが8丈、24メートルということですね。大変大きい。

現在建っているものは、実は「礎石立」といいまして、大きな石を据えて、その上に柱を立てております。出雲大社は古くは掘立柱だったということがわかっておりまして、先ほど紹介した寛文、その1つ前が慶長という江戸時代初期なんですが、豊臣秀頼が造替しております。そのときから出雲大社は礎石を使って建てるようになりました。ですから、それ以前は掘立柱だったということです。

現存する大社造で一番古いのは、今モニターに出ています神魂神社です【図14】。国宝の建造物で、出雲大社より随分東、松江よりもさらに東の大庭というところにあるんですが、ここは「出雲国造」の代がわりのときに火継神事を行う神社として有名です。神魂神社といいます。これも国宝になっておりまして、天正、16世紀の後期の建物で、大社造としては一番古い建物です。

棟持柱が、先ほどの出雲大社の御本殿よりも、明確に壁の真よりも前方に突き出ています。壁の中心ラインよりも前方に出ている。本来的な棟持柱の形態をよく残しているのではないのでしょうか。



図14 神魂神社本殿（島根県松江市）

それで出雲大社といいますと、ちょうど2000年に地下からものすごく太い柱が出てきました。國學院大學の杉山林継先生と私も発掘調査委員会に参加させていただきました。つぶさに状況を見ることができたのですが【図15】、これをどう見ますかといいますと、今、この奥、ちょっと

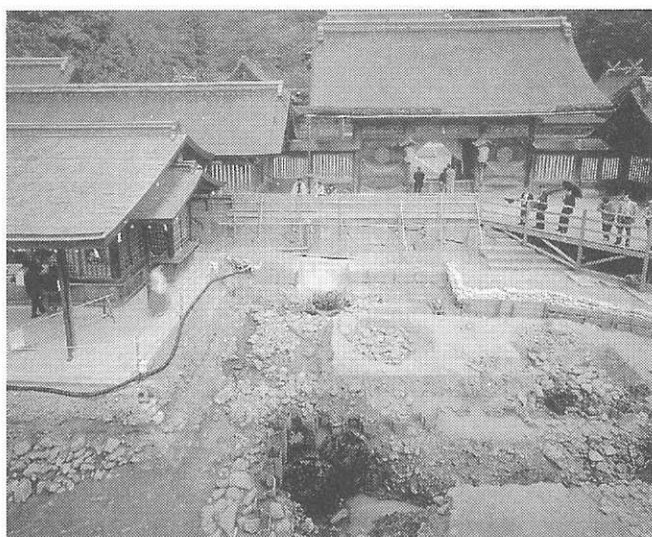


図15 出雲大社境内遺跡発掘現場（島根県教育委員会）

出ていないですけれども、こちらの奥に御本殿があります。御本殿の前の見えるところは桜門があり、桜門の屋根で、さらにその前の八足門で、この写真に写っていない手前のほうに拝殿がございます。そこの後ろから、ここに何か最初地下室を、祭礼準備室をつくろうとして工事を始めて、工事に使う矢板、工事現場の土どめに使うような天板をガンガン打っていたそうです。この矢板という工事現場の鉄板を打ち込んでいたら、何かコツンと当たって、何だということで掘り出したら、出てきました。

柱は3本一組みになっていますね。結局、3カ所を掘ることができまして、ちょうどこれが建物の中心の、今の言葉で言えば心御柱と南の宇豆柱が発掘されました。ですから、実は大社造というのは、大体対称的に規則正しく配置されていますから、この辺とか、この辺とか、この辺とか、もっと奥を掘ると必ず出てきます。既存の建物がございますので、なかなか発掘というわけにはいかなくて、今回の発掘では3カ所だけを発掘いたしました。

一番南側の最初に出てきた3本組みは3本東ねて1カ所の柱としているという。周囲は手を広げて届かないぐらい。大体、直径が1メートル35とか、1メートル40あります、1本の直径が。大変太い柱です。

よく日本海側から巨木が出てきた、巨木が出てきたと言って「巨木文化」

とか呼びますが、青森県の三内丸山は大変有名ですが、太い柱の根っこが出てきますね。三内丸山で、あそこはクリの木ですけれども、直径1メートルです。三内丸山で大体直径1メートル。出雲大社は、1本が1メートル35とか1メートル40です。材質はすべて杉でございました。

この木ですね【図16】、この一番南側の柱をもっと掘っていった一番深いところの先端がこういう状況になっていました。これはちょうど一番底に当たるんですが、カットしているんですね。現場でカットしたような跡が見えます。それと特徴的なのは、この穴なんです。これを建築のほうでは「目途穴」と称しております。ここに綱を結びつけて、巨木を運ぶ、あるいはいかだに組む、そういったときに使う穴です。それが出雲大社からきれいに出てきているんですね。

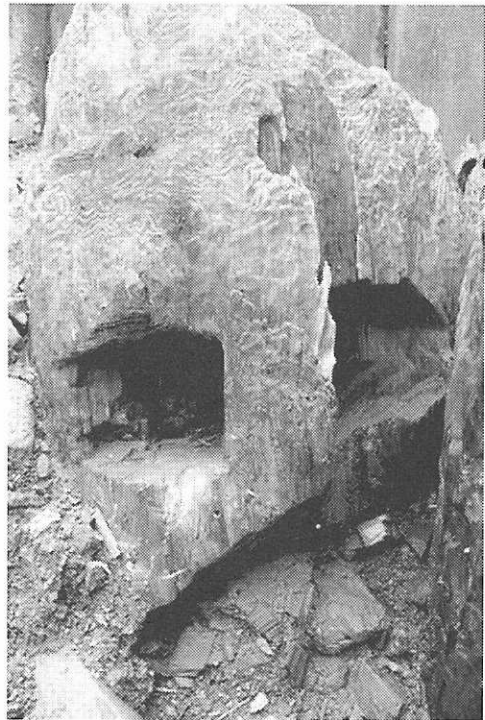


図16 宇豆柱端部の目途穴

またこれは話は全然違うんですが、これは長野県の諏訪大社の御柱という祭りがあります。これはモミの木を遠くから引っ張ってくるのですが、実は御柱にも穴があいていて、綱で引っ張ります。要するに御柱祭りでも目途穴を使って材木を運んでいるんですね。大社で出てきたのと同じやり方をするわけです。

これは絵巻物ですが、『石山寺縁起』という、滋賀県の石山寺というお寺がありますが、その縁起絵巻の14世紀の絵巻物【図17】ですが、見ていただきたいのはこの材木を運んでいる部分です。人力で綱を引いて運びます。ちょっと見にくいのですが、材木に目途穴をあけて綱をつけて引っ張っている。それと同じものが出雲大社の柱の根っこにあったということです。

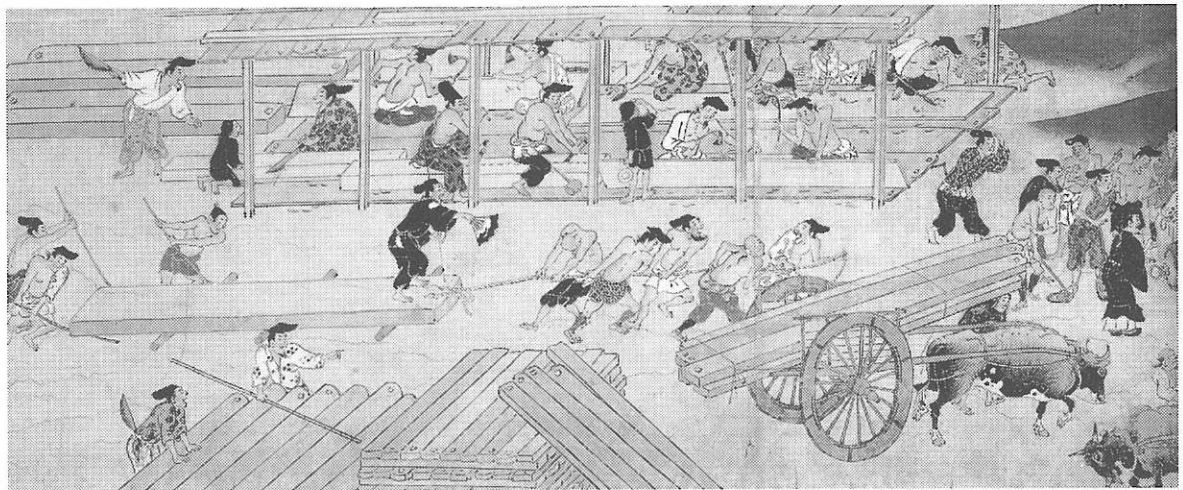


図17「石山寺縁起絵巻」(鎌倉時代)

これが心御柱のところですね。中央の柱にある3本組みです。

中央の柱にある3本組みの材質は杉で、実はものすごく成長の早い杉ということで、直径は1メートル35とか40あるのですが、樹齢が200年ちょっとという、とてもとても今では考えられないぐらいの樹齢だったことがわかりました。ものすごく成長のいい杉だったということなんですね。

それで出雲大社のこの建物につきましては、伊勢の神明造とはいろいろ違う特色があります。これは「本殿の位置の移り変わり」と称していますけれども、先ほど紹介しましたように、伊勢の場合は隣に敷地をつくっておいて、きれいに左から右、右から左と移していくんですね。今、そのため、形態がよく伝わる。

ところが、出雲大社というのは、僕は大らかで好きなんですけれども、今わかっているだけで現在の御本殿がこれですね、延享。今、ここの位置に建っています（【図18】⑤）。その前建っている、これもはっきりしてしまっていて寛文がここ（【図18】④）でした。その前に建っていたのが、今回の発掘で同時に出てきたのですが、慶長。江戸時代の初め、秀頼がつくった。この位置（【図18】③）から出てきました。その前、ちょっと時代はわからないのですが、室町時代ということで、今、拝殿が建っているあたりから出ています（【図18】②）。今回発掘された、3本組みの柱が出てきた鎌倉時代の

建物はここに建っています（【図18】①）。要するに、敷地内で、何か空き地を探して、あいているところに建ててしまうんですね。全く大らか。

それと、この間の年数。伊勢は20年ということできちょうめんにやるのですが、いろいろな間隔が

あきまして、遷宮の年代はもっと古いのもわかっているのですが、それが定期的ではないんですね。定期的に建て直すという制度は出雲大社にはございません。最近、「60年に一度の遷宮」とか言っているのも、これは最近の話で、古くは「破れるに随いて修理する」というふうに言っておりますが、壊れたら建て直すという、大変大らかなシステムで、まあ壊れるまでほっておくようなところですね。

逆に言いますと、あいたところにぼこぼこ建てているということは、実はこっちのほうとか、こっちのほうとかを掘ると、何か出てくると思います。十分その可能性はあると思いますね。出雲大社の境内を掘ると、また違う時代の御本殿の遺構が出てくる可能性があるとは私は確信しております。おもしろいところですね。

大社の話が長くなりますけれども、これは有名な「金輪造営図」と呼ばれている出雲大社の宮司家に伝わる古図なんですね【図19】。残念ながら、この絵図面自体は江戸時代の写しなのですが、右側はその起こし絵図です。江戸時代のものなのですが、かいてある内容は古いだらうという説と、こんなもの、荒唐無稽ででたらめだという説と両方ございました。

実は、発掘の前までは、こんな3本組みの柱なんていうのはあるわけない、日本はおろか全世界にこういう3本のこういう巨木を組んで柱にするなんていうのはないんですね。ですから、この絵図だけでは、こんなのはうそだ、

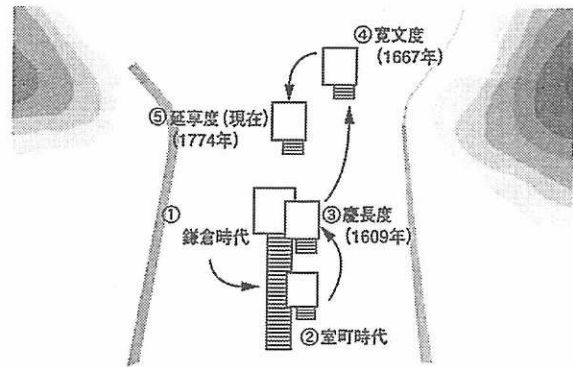


図18 本殿位置のうつりかわり
(島根県教育委員会パンフレット)

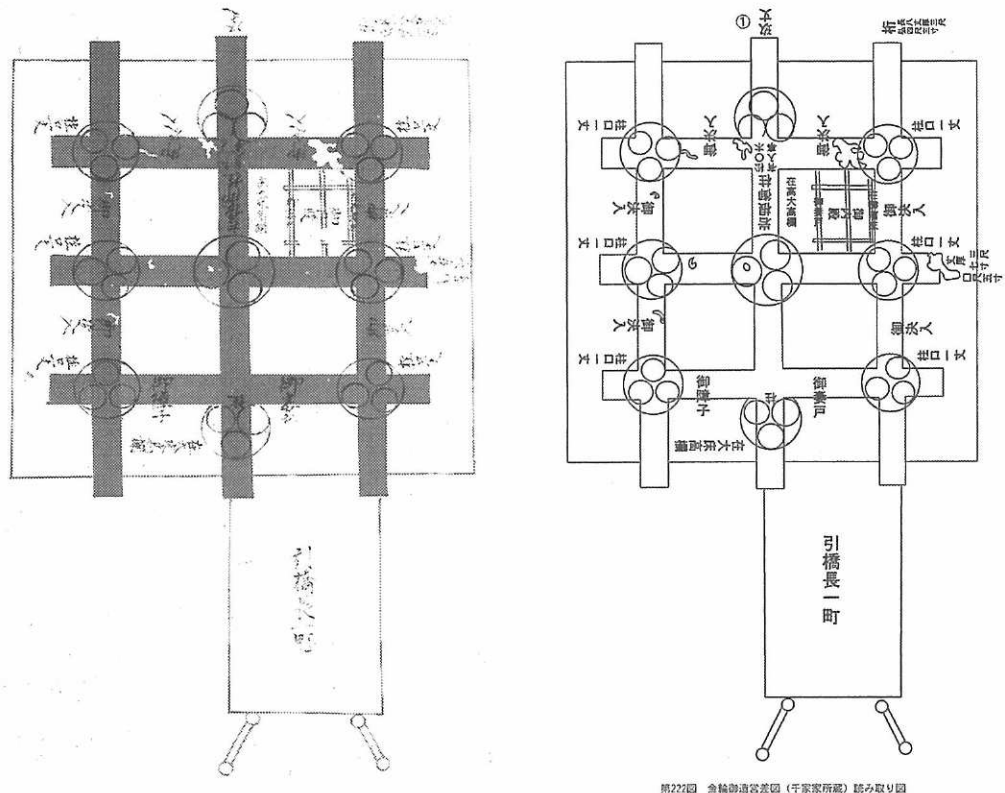


図222 金輪御造営図（千家家所蔵）読み取り図

図19 金輪御造営図と読み取り図（出雲大社所蔵）

いい加減な図だということで評価されていなかったのですが、発掘後一躍注目を浴びることになりました。

こういうのがあるということですね。大体9本の柱、これが真ん中の柱ということで、いろいろ寸法が書いてあるんですが、例えばこの直径、大きな円の直径が1丈、3メートルというふうなことです。この大きな円の直径が3メートル。ですから、大変巨大な柱でつくっていたんだという裏づけだと思います。

あと有名な話では、ここの、これは階段をあらわしていると思うんですが、ここに言葉があります。「引橋長一町」ということで、これは階段。階段のことを「橋」ともいいます。長さが一町あると。大体110メートルとか109メートル、そういう長大な階段だったということが書いてあって、これもまあうそだと言われていたんですけども、あながちないことはないのではないかと私は考えています。

平安時代の本に「口遊」という本がございまして、小学校の教科書みたいなもので、いろいろごろ合わせで暗記する本なんですね。そこに有名な言葉で、日本で大きな建物は何かというような設問に、「雲太、和二、京三」という言葉があるんですね。日本で大きな建物は何か、「雲太、和二、京三」、そういうふうに見えるという意味です。

「雲太」は、ここに解説があるように「出雲の太郎」で、出雲大社本殿。「和二」とは何かというと、「大和の二郎」で東大寺の大仏殿。「京三」とは何かというと、「京都・都の三郎」で平安京の大極殿、こういうのが日本の大きな建物だというふうに見える、暗記しなさいというような本なんですね。これをどう理解するかでいろいろな説があったんですけども、単純に高さを言っているんじゃないという先生もありましたし、一方で、これは平面を比べているわけでは絶対ないんだから、高さに違いないというふうに解釈する先生もいらっしゃいました。どちらもちょっとはっきりしないのですが、先ほどの巨木が出てきたことなどから言いますと、私はこの東大寺の大仏殿よりも高かったということは十分あり得るのではないかと考えています。

ちなみに、この東大寺大仏殿は、記録で高さ15丈幾つというのがはっきりしております。15丈というのは45メートルちょっとですね。ということで、この高さが確定するわけですね。ですから、それよりも太郎が一番ですから、高いのではないかと。

この話と別に、また出雲大社には伝承がありまして、現在の建物は高さ8丈で、中古、少し昔というような意味でしょうかね、中古はその倍の16丈、大古、大昔はその倍の32丈という伝承があるんですね。これは一番古いので室町時代ぐらいの文献にも出ているのですが、そういう伝承がほんとうかどうかというのがまた問題になっていて、この説を信じると、東大寺の大仏殿の15丈よりも高いということですから、伝承にある16丈というのも十分可能性があるのではないかと私は考えています。

そういったことで、いろいろな先生方がああだこうだと言って復元した模型が実はこれで【図20】、これも古代出雲歴史博物館に飾っております。

こういう発掘事業の後、復元模型などをつくるのですが、普通ですと1つの案にまとめるのが常識です。発掘の成果としてこういうのが考えられるというふうにして1案まとめるのが普通なんです

が、この場合は、実は建築関係ではもう1人、今、鳥取環境大学の先生をされています浅川先生という方が参加しておりまして、私と浅川先生が建築関係だったんですね。で、全然意見がまとまらない。

そこで、いろいろな先生を集めてつくろうということで、3人の先生方を加えて合計5人でそれぞれ勝手につくるということで5つの模型ができた。これは初めての試みで、5つあることが結果として復元案はいろいろあるんだということがわかっておもしろい試みだとなかなか好評のようですね。

2つが16丈説で、3つが、そんなのあり得ないという説で、16丈説を否定する説です。同じ資料を使って5つできちゃうんですね。

私は福山敏男先生以来の説を踏襲しておりまして、16丈説を肯定する説です。と、まあこういうふうになって、なかなかよくわからないのが復元です。

続きまして、住吉造【図21】。これも古代出雲歴史博物館の模型の写真ですが、大阪の住吉大社で代表される形で、切妻造の妻入で、これも大変直線的なデザインでございます。あまり事例は多くないのですが、大阪の住吉大社は、幕末、文化年代の建物ですが、一番古いのでは、現存するところでは福岡の住吉神社のが江戸時代の初めのものが残っております。



図20 出雲大社本殿復元模型
(鳥根県立古代出雲歴史博物館所蔵)

この住吉造でよく言われるのは、この形が天皇の即位のときに行われます大嘗祭の大嘗宮の建築とよく似ているということが指摘されております。中が2室に分かれているんですね。これが前のほうで、2室に分かれている。これも特徴の1つです。

平面図、正面図、側面図【図22】、大変簡明な建物で、置き千木ですね。これが住吉造です。

住吉大社へ行きますと、前に拝殿が建っていきまして、正面はよく見えませんですね。

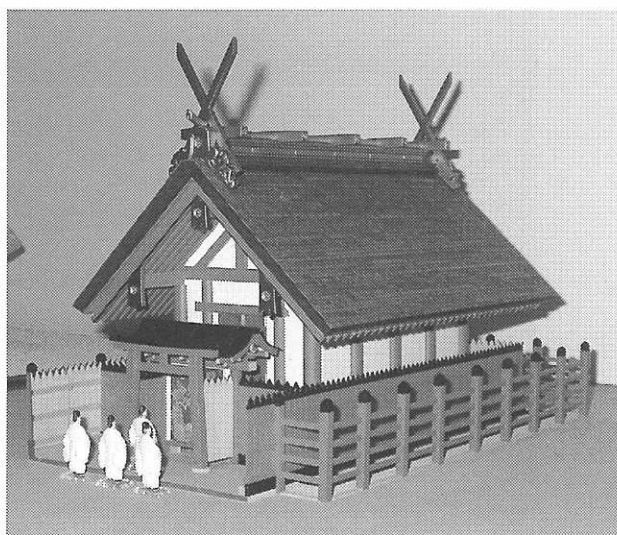


図21 住吉大社本殿1/50
(島根県立古代出雲歴史博物館所蔵)

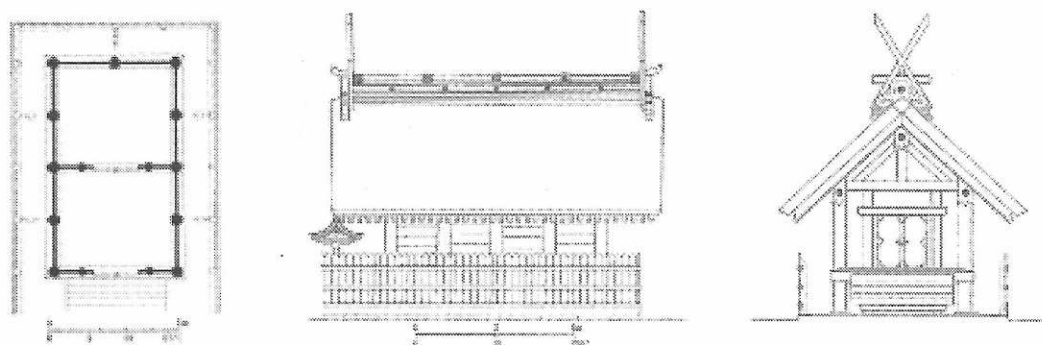


図22 住吉大社本殿 平面図 側面図 正面図 『日本建築史図集』(日本建築学会編)

かわりまして春日造です【図23】。これは奈良の春日大社で代表されるつくりです。

この模型も古代出雲歴史博物館の模型です。4棟並んでおりまして、妻入で比較的小型です。正面には、これはやはり庇なんですね。正面に何か出っ張っているのが見えますが、庇。

それと、ここではちょっと湾曲した優美な千木。置き千木ですが、もう完



図23 春日大社本殿1/50 (島根県立古代出雲歴史博物館所蔵)

全な飾りと化している千木が乗っております。

春日大社の土台はものすごい大きな角材で、その上に柱が立っております。

これが正面図 (【図24】中)。

側面図 (【図24】右)、側立面で見ると、この上に柱が立っているわけです。

春日造は、地方的には全国に点々とあるのですが、奈良県と和歌山県に比較的密度が高く分布しています。

これは平面図 (【図24】左)。1室で大変小さな建物。この辺が庇に当たるわけですね。この辺が庇で、この4本の柱の中が母屋です。

春日大社の建物は、やはり幕末、文久でしたかね、に建てられたもので、やっぱり遷宮の制度がありまして建て直すというのがあるんですね。

建物として一番古い春日造は、奈良県に円成寺というお寺があるんですが、そこにある春日堂・白山堂という建物です。お寺の中にも神社がかつてはまつられていた。建物自体として一番古い春日造で、鎌倉時代ですね、鎌倉時代初期、安貞という年代、1227年から29年です。

確証はないんですけども、この建物はもともと古い春日大社の建物をここに下賜したというか、要するに移した。遷宮に当たって不要になった春日

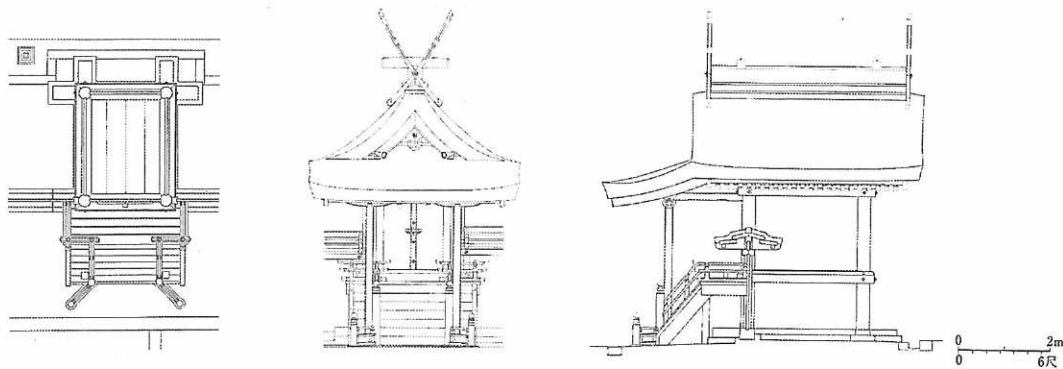


図24 春日大社本殿 平面図 正面図 側面図 『日本建築史図集』(日本建築学会編)

大社の建物をここに移したという説もあります。春日大社でそういう慣行がありまして、「春日移し」と呼んでいます。江戸時代のものですけれども、「春日移し」というのが奈良に何棟か残っています。春日大社からもらってくるわけですね。これもちょっとかなり古くてよくわからないんですけども、そうではないかなという説もあります。

側面図で見ると、庇の部分がよくわかるわけです（【図24】右）。

そういうことで、平入系とか妻入系で代表的な神社本殿のつくりをご紹介しましたが、これが相互にどういう関係になっているかということがやはり考えられてきました。

これはちょっと古い本に出ている模式図なんです（プリント「神社建築の流れ」）、どう見るかという、「時代」と書いてあります、こっちが古い。「大和・飛鳥」「奈良」「平安・鎌倉」「桃山」と、こう上のほうから下のほうに時代が流れてくるんですね。

いろいろな何とか造というのがどういう系列になっているかということで、ひとつ大もととして出雲大社の大社造があって、もう一つ大もととして伊勢の神明造、「唯一神明造」とも呼びます、神明造があって、それからいろいろな造が派生しているというような解釈ですね。神社としての位置づけが大社と伊勢というのは大変大きいので、そこから何か始める。大社は妻入、伊勢は平入というふうになっていて、ちょうどそれが対称的でうまくできて

いるんですね。大社造のほうからは住吉造。ちょっと大鳥造を省略しましたがけれども、住吉造ができて、それが春日造に至るという図式。平入系のほうでは、神明造から流造、さらに庇がいっぱいできている日吉造なんていうのが派生するという図式を描いていたのです。

この説は、何か機能論的な進化論的な説で、私の学生のころはこういうことを授業で講義された覚えがあります。機能論的というのは、要するに庇のない大社造から、ここに庇のある春日造に進化したと。あるいは、ここは大社造は基本的に1室の空間で、住吉造は2室に分化したとか、機能的に何か上のほうから下のほうにいくと複雑になっているなんていう考え方ですね。そういう複雑になったものは新しいのだと。神明造のほうも庇がない。流造は庇がつく。日吉造では三面についたりする、こういうのが新しいのだと、派生したのだというような考え方で説明されていたのですが、もうそれはちょっとおかしいのではないかというのが1つの考え方として示されております。その辺は、プリントの真ん中辺、1ページの真ん中辺に「空間の発展の方向性（機能論的考察）」で、母屋だけの建築から母屋プラス庇の建築へ発展するという考え方はちょっと疑問ではないかということで、こういったものを1つの系統図として何から何が派生してなんて考えるのはちょっと無理があるのではないかということが言われております。

それで別の考え方として提示されているのが、次の考え方、「神殿の有無から見た神社の3形態」（プリント）ということで、全く違うところに目をつけて神社を考えようという考え方です。

プリントに①、②、③と提示しておきましたけれども、1番としては、神殿を設けない。ここで本殿と言ってもいいかと思うんですけども、神様がおさまる建物を特に設けない神社があるんだと。実例としては奈良県の大神神社、あるいはこれも奈良県の石上神宮。この石上神宮は、現在は大正時代に御本殿を建てておりますが、もとはありませんでした。大正時代の御本殿が今は建っております。あと諏訪大社。これは長野県諏訪湖の湖畔に4社ご

ざいます。上社と下社それぞれが2つに分かれていて4社あるんですが、この諏訪大社なども本殿を設けない神社として大変有名な神社です。これらはいずれも歴史が古くて、かなり影響力のある、いわゆる大社なんですね。そういったものが本殿を設けないで神祭りをやっていたということ、こういうのが古いスタイルではないかという話なんですね。

2番目としては仮設の神殿を設けるということで、どういうことかという、普段は神殿、本殿をつくっていないんだけど、お祭りがある、神事があるというときに建物を建てて、お祭りが終わると撤去する、そういうスタイルがあるのではないかということで、事例として有名なのが、奈良の春日大社にあります春日若宮、ここはおん祭りというお祭りをします。後でちょっと説明しますが、そのときに、境内の少し離れたところに建物を建てて、そこに神様をお招きしてお祭りをする。お祭りが終わると、その建物を撤去するというのをします。それと、先ほどもちょっと出てきた天皇の即位儀礼として行われます大嘗祭のときの大嘗宮。これも神事の7日から5日ぐらい前にぱっと建てるというふうに聞いております。で、神事が終わるとやはり撤去する。そういったあり方。お祭りのときだけ仮に建物を建てて、終わったら撤去してしまう、そういうスタイルがあるのではないかという考え方です。

3番目が、これは我々がよく見かける、常に御本殿がある、常設の神殿を設けるタイプ、こういうのがあって、どちらかというと①、②、③というふうにだんだん変わってくるという図式も描けるのではないかという考え方です。①のことを「自然神道」、②、③を「社殿神道」と称することもあるようです。

こういう考え方があるとして、ちょっと事例をフォローしますと、これは①の事例として挙げました大神神社ですね、奈良県の三輪山【図25】。この山が三輪山で、ここに神様がいらっしゃる。大神神社というのは、このふもとにありまして、立派な建物があります。ところがそれは御本殿ではなくて、

拝殿なんですね。人が拝礼するための建物です。この奥、裏のほうが三輪山になるのですが、そのふもとにこういう立派な建物が建っています【図26】。建物自体、寛文、江戸時代の建物ですが、参拝者が上がっていますけれども、これは拝殿であって、神様がいらっしゃる場所ではない。

その辺のことを示した江戸時代の絵図があって、三輪山が描かれ、そのふもとに、今見た拝殿が描かれている。これが、「大神神社」と言っている拝殿ですね。そのちょうど裏側にち

よっと柵、垣があって鳥居、有名な「三輪鳥居」という3つの間口がある鳥居があるのですが、そういう垣根と鳥居があって、「禁足地」という足を踏み入れてはいけない神聖な場所があるんですね。ここに神様をお招きして、その前の空間と拝殿で拝礼するというスタイルです。

これは大神神社の摂社の檜原神社という、すぐそばにある神社なんですが【図27】、同じようなスタイルで、見るのがたやすいので写真を撮ってきたのですが、ここの垣根、垣がありますね、垣、この中が禁足地であっ

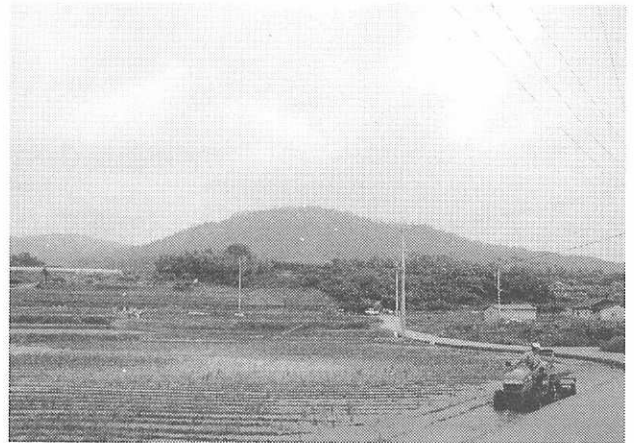


図25 三輪山



図26 大神神社拝殿（奈良県桜井市）



図27 大神神社摂社檜原神社

て、その正面に鳥居がある。鳥居のほうは間口が3つある鳥居で、「三輪鳥居」といっています。さらに普通の鳥居ではなくて、これは格子がついているんですね。普通、鳥居といいますと、ここに何もなくて通れますよね。通るんですけども、ここでは鳥居に格子がついていて、みだりに人が入れない。神聖な場所であることを示しているわけです。こういったものが先ほどの大神神社拝殿の裏側にもあります。そういった事例。これが大神神社です。

これは諏訪大社です【図28】。長野県の諏訪大社の上社の本宮というところなのですが、今は建物が建っています。これは江戸時代の天保の建物ですが、実はこれ、ここに見えているのは本殿ではなくて、これもあくまでも拝礼するための建物で、この裏側は禁足地になっております。諏訪の場合、何を拝礼するかはちょっといろいろ分かれていますのですが、御本殿がないことだけは確かです。

これは、境内四隅に立っている「御柱」と呼ばれる独立柱ですね【図29】。諏訪大社のこれは上社の本宮の御柱です。四隅に立っておりまして、6年に一度、寅の年と申の年に立てかえています、その年に、山から切り出して延々と引っ張ってきて立てる。それを



図28 諏訪大社上社本宮社殿

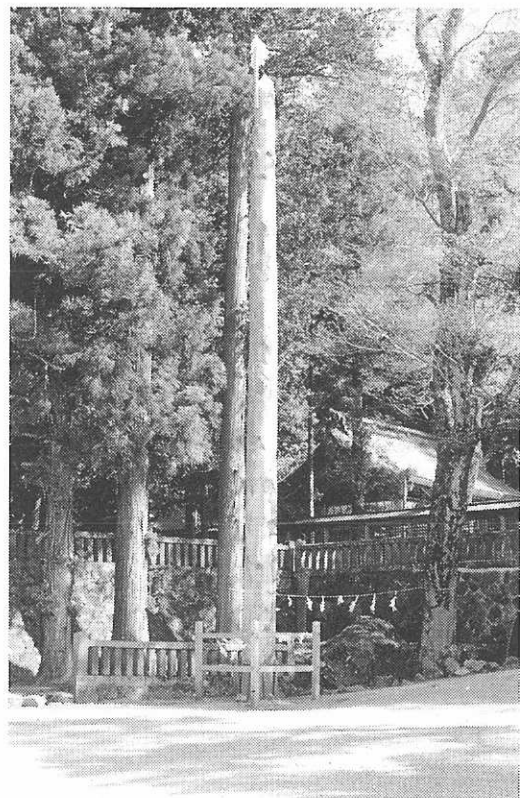


図29 諏訪大社上社本宮一之御柱

最大の祭りとしているんですね。

これは本宮の一之御柱です。

「木落とし」と呼んでいます行事は、野を越え、山越え、川越え、延々と引っ張って行ってがけを引っ張って御柱を引きずりおろす。そのとき、しなくてもいいと思うんですけども、一番先頭に乗っかるのがここの諏訪の男性の最大の勲章らしくて、乗っかるんですね。時々負傷者、死傷者まで出るらしいですね。それほど諏訪の男衆は燃える神事だそうです。

これは秋宮の御柱を立てるところです。これも乗っかっているんですね。見た目は何の役にも立ちませんね、乗っかっている。邪魔になるだけ。危ないだけ（笑）。落ちないようにくくりつけて乗っかって、何か騒いでいるんですね。人が乗ったまま立てていくんです。

次に、これは2番目、②の春日若宮おん祭の御旅所です【図30】。春日大社の若宮で、春日大社の境内は大分広いのですが、興福寺寄りの、普段はこの前に広い野原があります。何にも建っていないところに、12月のお祭りのときにこういう建物を建てる。基本的には春日造なんです、屋根には松葉をふいたり、この辺の柱なども、木の皮をむいていない「黒木」と呼ばれる木ですね、普通はもう木の皮をむいて製材するはずですが、「黒木」と呼ばれる、切ったままの材、この辺もちょっと見ると丸太ん棒で黒木のままなんですね。急に建てた、あるいは仮設だということをわざと示しているような建物を建てます。

これが黒木という、樹皮がついているんですね。この辺も何か不ぞろいの丸太ん棒で垂木をつくるわけですね。この辺も丸太ん棒です。屋根は松葉。こういうものをつくっておいて、春日若宮のいつもいらっしゃると

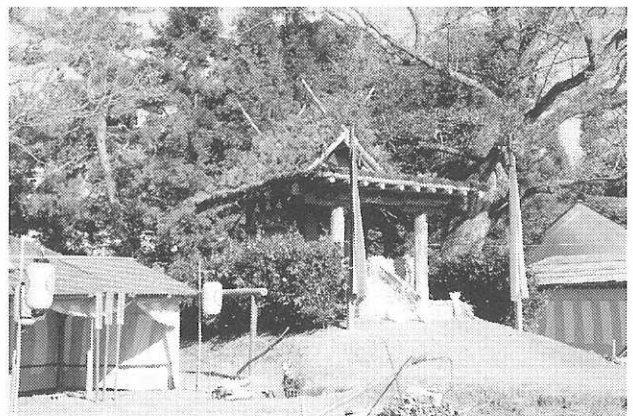


図30 春日若宮御旅所

ころ、実は御旅所の奥のほうに春日若宮のふだんいらっしゃる本殿があるのですが、そこから、先ほど見た仮設の建物に夜中、遷宮されるんです。真っ暗で、真冬12月ですから寒くて、大変なお祭りなんですけれども、夜中に御神体に移す。

そうしてもって御旅所に移すわけですね。この前は広っぱになっていて、そこで昼間、いろいろな神事を行って、神様にお供え物をしてお慰めする。また神様に帰っていただいて、御旅所の社殿は撤去してしまう。そういうことをやっております。これが2番の実例です。

そういうことで、建築のほうからそういったいろいろな御本殿の特色をどう理解するかということになるわけですが、プリントの最後に書いてありますことなんですが、「神の移動と神社」ということで、ある考え方として、神様は常に神殿にいらっしゃる。ずっといらっしゃるというものもあるのですが、そういう神社ばかりではなくて、神様は常にはいない、時々ふらふらどこかへ行ってしまう、あるいはどこかから来てふらっと来るとか、そういう気ままな神様もいらっしゃるというような観念があるのではないか。お祭りのときだけにやって来る。それで神迎え、あるいは神送りという神事なども生まれてくる。建築のほうでも、そういった神様が移動しながらいろいろ神事を行うということに本殿は対応しているのではないかという考え方ですね。

今日紹介したような御本殿の形式をそういった観点から分析してみますと、1つは神の移動を前提にした本殿形式、神様が移動するということを前提とした本殿形式として、流造、春日造が挙げられるのではないかと。これはどちらも比較の問題ですが、小型であって、特色としては土台建てなんです。土台の上に柱を立てている。

もう一つは、神の常住を前提にした本殿形式で、これは神明造、大社造、住吉造が当たるのではないか。これはどちらかというと本殿としては大型であって、柱の立て方としては、古くはみんな掘立であるということ。掘立と

いうのは、もうそこに固定する方式ですから、建物の移動なんていうのはちょっと考えられないですね。土台にしますと、これは比較的簡単に建物を動かすことができるわけです。

そういった建物を動かす事例をいろいろ探しますと、あまりはっきり資料を提示して示せるものが少ないのですが、その中で唯一資料的な裏づけにあるのが次の話で、図（【図31】）と、そして、プリントの2つをご覧ください。図のほうから見ていきますと、これは京都の上賀茂神社の話でございます。賀茂社は下賀茂、上賀茂と、2つに分かれていますが、実は下賀茂のほうは全然違うやり方をするんですね。これは上賀茂のやり方です。

最初に、本殿のあり方も、上賀茂神社は本殿と権殿である、下賀茂神社は両方とも本殿で、東本殿、西本殿であるということをお話ししましたが、それがきいてくる。

これを模式図であらわしましたが【図31】、これをつくったもとの資料になったのは、上賀茂神社の所蔵する文書で嘉元3年、1305年に当たりますけれども、ご遷宮が行われてそのときの記録『御遷宮日記』です。この日記に、いつ、何をしたなんていうのが比較的細かく書いてあるんですね。その時間を追ってどういうことを行ったかというのを模式的に示したものです。

順番に時間はこの①から②、③、そして⑤というふうに進んでいきます。

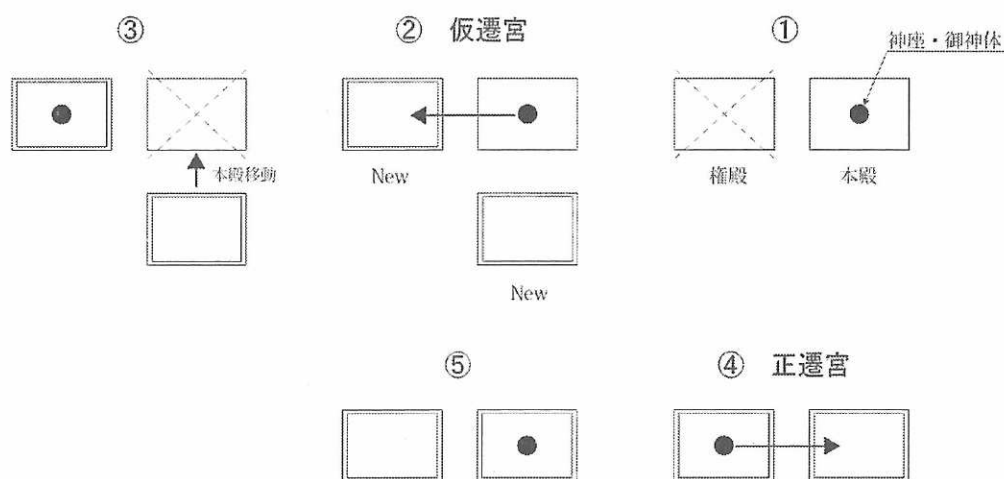


図31 上賀茂神社遷宮模式図 嘉永3年（1305）

これをどう見るかという、右側が本殿、左側が権殿なんですね。そして、本殿のほうに御神体がいらっしゃる。

それで、遷宮ということになります。建物を新たに作り直すということをするわけですが、そのときまず何が行われたかという、一番最初、本殿の隣にある権殿、破線でバツが書いてありますが、これを取り壊すのです。撤去する。まず最初に撤去する。更地にするんです。

次に2番目なんですが、2番目にどうしたかという、その取り壊した権殿を新しく建てる。「New」と書いてある場所です。この二重の四角で囲ったのは、「新しい建物」という意味です。

同時に、これがおもしろいのですが、この本殿の前方に新しい本殿を建てるのです。この新しい権殿、新しい本殿を、同時に2棟建てます。だから、一時期、3つ並んでいるんですね。そうしておいて、御神体を新しい権殿にお移しします。これを「仮遷宮」と称しています。

そうして、次どうするか。3番に移るのですが、3番はどうするかというと、これが御神体ですね。新しい権殿に今いらっしゃるわけです。どうするかというと、旧本殿、破線でバツしてあるこれを取り壊すのです。古い本殿を取り壊して、ここを更地にする。そうしておいて、本殿を移動します。どうするかというと、この新しい本殿の下にころという丸太をかませて、ろくろで引く、と『御遷宮日記』に書いてあります。ろくろというのは、重量物を運ぶときとか何かに使う人力のクレーンみたいなものですが、そのろくろで移すわけですね。このときに、建物の下に土台があるということが大変重要なわけです。土台がないと、これを文字どおりころころとは転がせないですね。ここで動かします。

次、4番なんですが、もとの位置に2つ新しい建物が建つわけですね。右が新本殿、左が新仮殿。今、新仮殿に御神体があるわけです。これをもとの位置の新本殿にお移しする。これを「正遷宮」と称しています。で、5番の状況に戻って、最初に戻るわけです。こういうことをやっているんですね。

これでもう一つ、2番の仮遷宮が嘉元3年、この年の8月7日の寅の刻に行ったという。これは夜明け前ですね。8月7日の夜明けか夜明け前ぐらいの時刻に仮遷宮を行った。

そして、3番、4番といくのですが、この4番の正遷宮の日時がわかっておりまして、これが同じ年、嘉元3年の8月8日、翌日の酉の刻、夕方、日没ぐらいです。

もう一度言いますと、この仮遷宮が8月7日の寅の刻、夜明けぐらいですね。で、正遷宮が8月8日、翌日の酉の刻、日没ぐらい。ですから、2番から3番を経て4番までが1日半で終了するのです。要するに神様が仮住まい、権殿にいる仮住まいがかなり短い時間、1日半の不自由なお住まいで済んでしまうという、ものすごいシステムなんです。そのために、あらかじめ建物をつくっておいて、つくってある完成している建物を引いてしまうわけですね。こういうことを中世はやっておりまして、嘉元の記録にはそれが詳しく出ているので、こういうことがわかるわけです。

その後、似たような詳細な記録はないのですが、時間だけわかるんですね。どのくらいの日時をかけて遷宮が行われたか。それはみんな短いんですね。ですから、厳密に言うと推測なんですけれども、こういうことを中世に上賀茂はやっていたと考えていいかと思いますね。それ以上は推測なんです、大変短い間で遷宮を行っているので、こういうことをやっていたと考えられる。

上賀茂神社というのは、ほかの神社もそうなんです、戦国時代、中世末、大変疲弊しまして、遷宮どころじゃないんですね。江戸時代の初めは、どこにどういう建物があったかわからないぐらい疲弊していたらしいです。現在見るようにまた整備されるのが、江戸時代になって徳川の時代になってからなんです。寛永という時代に新たに建物が整備されてまいります。そのときは、似ているんですけれども、その精神が全然違うふうになってしまうんですね。それが次の図（【図32】）でございます。

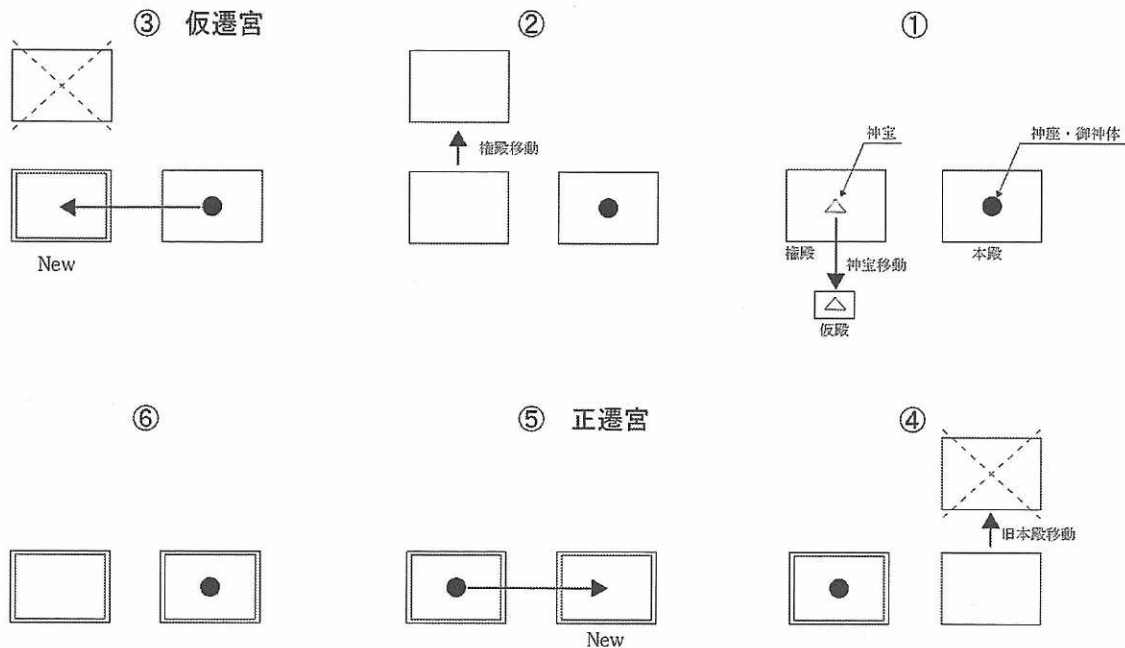


図32 上賀茂神社遷宮模式図 寛永4年(1627)～寛永5年(1628)

もともになった資料は、寛永のときの記録である『寛永造営遷宮記』という、これは上賀茂神社の所蔵する文書ですが、それにいろいろ詳しい工程が出ています。このときは寛永4年から寛永5年にかけて遷宮が行われたのです。

これもやはり1番から2番、3番、4番、5番、6番というふうに進んでいきます。右側が本殿、左側が権殿というのは同じです。

このときは最初に何をするかというと、権殿の前にまた権殿の権殿みたいな仮殿を建てるんですね。ここからちょっとおかしくなっています。昔のこともよくわからなくなってきたのか、権殿の権殿を建てる。仮の建物を建てる。何をしたかということ、権殿におさめられている神宝を移動しています。三角印は神宝をあらわしています。そこから始まります。そこにちょっとメモに日付を入れておきましたが、寛永5年の2月26日のことです。

同じ日、2番になりますが、これは何をしたかということ、建物を移動するのですが、旧権殿を後方に動かすんです。ころ、ろくろを使って後方に権殿を移してしまう。ここに空き地をつくるわけですね。

その次に何をするかということ3番なんです、ここが空き地だったわけで

すが、ここで造営を始めるのです。新しい権殿をこの場でつくる。それが寛永5年の4月9日。その後、旧権殿を取り壊すんですね。旧権殿を取り壊すなんていうこともやる。で、新たにつくった新権殿に御神体を移す。これが寛永5年の4月9日です。仮遷宮と言っています。新たにつくった権殿に御神体を移すんですね。

次、4番目になりますけれども、その次に何をするか。これは、この建物が空き家になるわけですね。今度何をやったかという、この旧本殿を後ろに引くんです。「旧本殿移動」と書いてあります。これが寛永5年の6月2日。そうすると、ここが空き地になりますね。ここが空き地になると、この場で新たに建て替えを始めるんです。「本殿立柱」という柱立てを8月22日に行っております。その後、この旧本殿を取り壊します。

そうすると、次は5番で、両方の建物が一応、何か違う方法なんですけれども、本殿と権殿が新たにできるわけですね。そうしておいて、新権殿から新本殿へ御神体を移す。これは寛永5年の12月24日で、正遷宮に当たるわけです。

で、もとの状況に戻るわけですが、これはどういうことかという、仮遷宮から正遷宮まで、仮遷宮が4月9日で、正遷宮が12月24日ですから、8カ月ですか、8カ月強、8カ月半、神様にご不自由な生活を強いるんですね。これはやっぱりちょっと間違ってしまったやり方で、古いやり方はうまく伝わらなかったんですね。ろくろで動かすということはやったんですけども、神様を仮の状態にとどめておくということをなるべく短くしようという根本的な発想は伝え切ることができなかったようです。これが寛永の遷宮です。

最近では、もう新たにつくるということはやっていません。今の社殿は文久、江戸後期のものです。その後、遷宮と称するもの、造替と称するものは、全くの新築ではなくて修理、屋根のふきかえ等々の修理でかえていますね。というような状況です。こういう、建物を移すことによって短時間で遷宮を終了させるということのためには、どうしても土台立でないとできないですね。

礎石立、掘立ではこんなことはできません。

上賀茂の場合は、東西の本殿を順番に使うなんていうことはしないんですね。東の次は西に御本殿にしたら非常に簡単ですが、そういうことはしない。東側が本殿であって、西側はあくまでも権殿なんですね。先ほど言ったようなことですが、土台は建物の原型を損なわないために必要不可欠な部材であるということです。

上賀茂神社とか春日大社というのは、大変歴史の古い神社で、こういう土台なども使う。ほかにもこういう土台で立てる神社はあったと思うんですが、考えてみますと、土台というのは考古学的に残らないんですね。掘立とか礎石立というのは、その跡が残ります。穴ぼこが残るんですけども、土台で物を建てたら、きれいさっぱり痕跡は残りませんね。ですから、古い土台立の何々というのがほとんど実証できないんですけども、もっともっとあったのではないかと私は考えております。

これは全く違う話で、『法然上人絵伝』という、これも室町後期から鎌倉時代ぐらいの絵巻物がある。いろいろな絵巻物には大工の造営しているようなところがよく示されておりますが、その中の1つのシーンですね。ぐるぐる回る柱状のものを立てて、取っ手を差し込んで、綱を巻きつけておいて、それをぐるぐる回して重量物、柱を持ち上げる。これを「ろくろ」と称しています。こういった道具を上賀茂では使うようです。

今日の話はあまり取りとめがなかったんですけども、神社のいろいろな形があって、1つは古い考え方として示した系統図みたいなことがちょっと考えにくいのではないかという話、意外に流造とか春日造の形が古くからある本殿形式ではないかと考えて、そういったことが結論といえ結論なんです、あまり実証される話ではなくて申しわけございませんが、こういうところですよ。(拍手)

※本学術講演会は、文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業オープン・リサーチ・センター整備事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」の成果である。

【プリント】

08.10.18

芝浦工業大学 藤澤 彰

神社本殿の建築的特質

平入系

神明造……伊勢神宮正殿、掘立柱、棟持柱(独立)

流造……上賀茂神社本殿、下賀茂神社本殿ほか

前面に庇を付加

側面から見ると屋根が前方に流れるように見える

上賀茂神社本殿、下賀茂神社本殿は土台立

神社で一番多い形式、6割から7割とも

妻入系

大社造……出雲大社本殿、出雲地方に集中的に分布

大型、9本柱、棟持柱(壁付)

古くは掘立柱、現在は礎石立(慶長以後)

住吉造……住吉大社本殿、あまり例は多くない

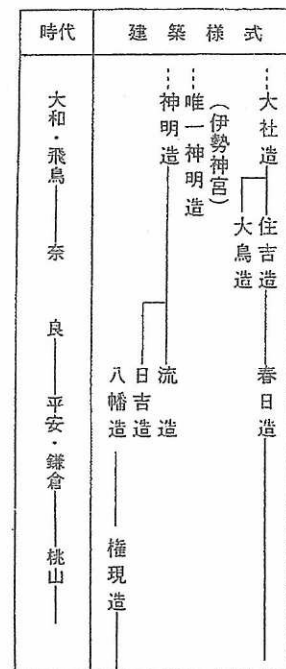
2室、大嘗宮正殿に似る

春日造……春日大社本殿

正面に庇を付加、小型

土台立

奈良・和歌山に比較的多い

神社建築の流れ(概略図)
疑問な点が多い

空間の発展の方向性(機能論的考察)

モヤだけの建築から、モヤ+ヒサシの建築へ発展する(疑問)

神社本殿の形式を系統図として考えられるか(疑問)

神殿の有無からみた神社の3形態

① 神殿を設けない(大神神社、石上神宮、諏訪大社など)

② 仮説の神殿を設ける(春日若宮、大嘗宮など)

③ 常設の神殿を設ける

① を自然神道、②③を社殿神道と称す

神の移動と神社

神は神殿に常住するわけではないという観念、まつりの時にやってくる……神迎え、神送り

神の移動を前提にした本殿形式……流造・春日造

小型、土台立

神の常住を前提にした本殿形式……神明造・大社造・住吉造

大型、掘立